

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4079600534		
法人名	特定非営利活動法人あたか		
事業所名	グループホームあたか		
所在地	福岡県田川郡川崎町大字安真木3083-2		
自己評価作成日	平成30年7月9日	評価結果確定日	平成30年8月7日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートうりずん		
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号		
訪問調査日	平成30年7月23日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホームあたかは、自然豊かな山里にあります。耳を澄ませば、鳥のさえずりが聴こえてきます。敷地内の畑で採れた野菜たちが、毎日の食卓を彩ります。窓からは、緑いっばいの美しい山々が見られます。春…淡い色の春紅葉と黄緑色の木々が気持ちをやわらげてくれます。初夏…暖かな日差しと新緑の爽やかな薫りに癒されます。秋…眩いほどの色彩があふれる紅葉は心を鎮めてくれます。冬…凜とした澄み切った空気に心が引き締まります。利用者みなさまは、毎日、そんな自然あふれる山々の景色の中から、四季を感じ楽しんでおられます。恵まれた環境の中で自然と触れ合い、ゆったりとくつろげる時間を大切にして、心身のリラクセスを図っております。また、家庭的な雰囲気を大切にしながら、少しでも役割を持つことで生きがいや日常生活の活性化に繋げ、笑顔で安心して生活していただける支援を行っております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開所13年目となり、朝礼時や定例会議で日頃の気付きを話し合い、理念のその人らしい日常生活を支援するケアが日々実践され、知人や入居者、職員の紹介で入居する方が多い。入居者間のトラブルや入浴時の着脱などの拒否を、其々の入居者が自分の誇りやプライドを保持する行動と肯定的に受け止め、対応などのスキル向上に努めている。医療機関から、前止めのおむつで入居した方は、座位での食事で少しずつ体力が向上し、現在は布パンツを着用するまでになっている。家族の「字をかけるようにしてほしい」との要望をアクティビティに取り入れしたり、入居者の現状報告に困惑す家族の言動を受け止め、その家族に応じた報告をするなど、入居者やその家族の意向を柔軟に支援している。介護職員処遇改善加算を取得し、職員の離職防止などに取り組み、運営推進会議で外部の意見を活かしながら、今後も理念の実践が期待できるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット/
事業所名 **グループホームあたか**

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	朝礼時に『理念』を唱和することで、全職員の理念の理解と意識を高め、気持ちが一いつになるようにしている。利用者の一人ひとりがその人らしい日常生活が送れるよう、また、尊厳を守る介護サービスに取り組んでいる。	理念を具現化したケアを実践するために、朝礼時の唱和が継続している。気持ちや感情をそのまま表出できる雰囲気や環境づくりで、その人らしい生活を支援している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	神幸祭や彼岸花まつりなどの地域の行事に参加する事で、入居者が地域の一員であるという意識を持てるようにしている。また、道の駅を利用する事で顔見知りの方との交流を保てるようにしている。	自治会の加入が継続している。近隣からの入居者が多く、地域行事である神幸祭の神輿見学や道の駅での買い物で地域の方々と交流したり、前の民生委員で運営推進会議のメンバーだった住職のお寺で、お齋に参加している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議で、利用者一人ひとりの現状と問題点・対策・支援方法を説明している。色々なケースを話すことにより、認知症状によって対応や支援の方法が千差万別であるということを理解していただく。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、利用者の日常を写真を交えて報告している。また、今現在、対応に困っている利用者の例を出し、外部の意見を参考にすることで、解決策に繋がることもある。	運営推進会議開催日時を定例化し、適切なメンバーに案内をしている。行政担当者から、若年性の入居者の役割づくりとして、重たい掃除機ではなく軽いモップで清掃をお願いしてはとのアドバイスを受けている。	運営推進会議の目的に鑑み、昼食の試食を兼ねた会議など、日時や内容の工夫で、より実りある会議開催や、廊下に会議内容を掲示するなどの公表を期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	2ヶ月に1度開催している運営推進会議には、地域包括支援センター職員が参加し、行事報告やサービス内容を伝えることで、協力・相談しやすい関係を築いている。	運営推進会議で担当者から、地域同業者の運営上の工夫なども情報提供をお願いしたり、家族が薬を飲ませたくないとの意向のある入居者の状況を相談するなど、良好な関係づくりに努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現在、外出傾向の強い利用者がいないことから、日中帯、玄関の施錠をしない取り組みを始めた。また、衛生面から利用していたつなぎ服も廃止した。安全面・健康面・衛生面を考慮した身体拘束であっても個人の判断で容易にはしないことを全職員が理解している。	身体拘束の適正化を運営規程に明記し、内部研修で身体拘束のないケアを周知している。杖を振り上げる入居者には、「ダメよ」と言うこともあるが、声かけで雰囲気を変えるなど、状況に応じた対応に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	テレビや新聞等で虐待の報道があった際には、朝礼やミーティングですぐに話し合うようにしている。決して他人事とは考えず、職員間で注意を払いあうなどして防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	一昨年、利用者の1名が成年後見制度を利用された経緯から、学ぶ機会があった。今後、必要性のある利用者がいれば、適切な支援ができるように勉強していきたい。	現在は、制度や事業を活用している入居者はいない。今後もパンフレットなどを整備し、必要に応じて紹介する予定である。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には説明が一方的にならないように、利用者や家族が十分に理解・納得をしているか、不安や疑問点はないか、気をつけている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者については、日常会話の中から意見や要望を引き出すようにしている。また、家族からは、面会時に利用者の日頃の様子を伝え、会話の中から意見や要望がないか推察している。	2ヶ月毎にホーム便りや運営推進会議内容を家族に送付し、意見の表出を促している。家族の「字をかけるようにしてほしい」との要望をアクティビティに取り入れたり、表示したおむつ代を考慮しておむつを持ち込む家族もあり、柔軟に対応している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミーティングをかねた毎朝の朝礼は、時間を掛けて行い、単なる申し送りにならないようにしている。また、代表者や管理者への垣根は低く、気軽に意見や提案ができる雰囲気作りをしている。	会議の枠組みがない朝礼は、意見が出やすく、早出や遅出の業務内容を話し合う場にもなっている。入居者にはスリッパより靴をや、褥瘡予防の車イスクッションの購入の提案が反映されている。タイムカード機器の上に設置された申し送りノートで、話し合いの内容は全職員に周知している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は毎回朝礼に参加し、介護業務にも積極的に参加している。職員と同じ業務をこなすことで、個々の努力や実績を把握しやすい環境にある。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	労働基準法に沿って労働条件を整え、採用にあたっては人間性を重視している。老若男女、学歴・資格の有無を問わずに採用にあたっている。また、各々の家庭の事情や希望を十分に考慮し、無理のないシフト体制にしている。	職安に求人広告を出しているが、応募がないのが現状である。新規職員の研修期間を設けたり、介護職員処遇改善加算を賞与として支給し、定期的な研修を実施するなど、職員の離職防止やスキルアップに取り組んでいる。休憩室で昼休みを交互に取り、30歳代から70歳代の職員が経験等を活かし、いきいきと就労できるように配慮している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	人生の大先輩である入居者の方々には、常に尊敬の念で接するように指導している。また、言葉使いや言動等で気になることがあれば、単なる注意ではなく、なぜそうってしまったのか原因究明に取り組んでいる。	外部研修開催場所が遠方なことが多く参加希望がないが、介護計画作成担当者を講師として、身体拘束や虐待防止に関する内部研修をしている。日頃は、入居者を人生の先輩として敬う言葉遣いを指導している。	介護職員の人権研修受講は必須であることから、保険者主催などの人権研修参加をお願いします。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は介護業務も行い、毎日職員と接しており、管理者や職員のケアの実際を目にする機会が多く、力量を把握しやすい。外部研修の受講の際には、勤務調整や費用面など全面的にバックアップしている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	掛け持ちのケアマネを通じて、他の施設の良い点を積極的に取り入れるなどし、サービスの質の向上に役立っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面談の際に、本人と家族から今までの生活の様子を詳しく伺い、スムーズに新しい生活に移行できるようにしている。また、入居に際して不安や要望があれば、全職員で話し合い、安心して入居できるように柔軟な対応をとっている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前面談では、まずは傾聴することに徹している。その会話の中から、家族の不安や要望ができれば、ひとつひとつ誠実に説明し、施設ではどういった対応を考えているかを伝えることで、不安の解消に努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	まずは、入居に至った経緯である第一の不安が解消されるよう、安心して新生活が送れるようなプランを提案している。必要であれば、他のサービス機関に相談し、利用できるようにしている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	炊事・洗濯・掃除等、できる範囲で無理のない程度にお手伝いをお願いしている。また、お手伝いの前後のお礼を欠かさずに行うことで、入居者と職員が互いに支え合う共同生活者であるとの認識を持ってもらう。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時には、入居者の日頃の様子を具体的なエピソードを交えて伝えるようにしている。入居者の現状を把握してもらうことで、共に支え合う関係性を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外出の際には、自宅や馴染みのある場所を経由する等し、思い出話に花を咲かせている。また、家族や友人の面会時には、具体的なエピソードを交えた事業所での様子を伝え、話が弾むよう楽しい時間を過ごしていただけるようにしている。	来訪する家族や友人を歓待したり、家族への年賀状や暑中見舞いづくりを支援している。「(自分に)優しい言葉をかけて下さい」と話す遠方から時折来所する家族もあり、当該入居者の現状に困惑している言動として受け止め、その家族に応じた報告をしている。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日々の生活の中で、利用者同士の触れ合いが楽しい時間となるように支援し、自室にこもりがちにならないようにしている。また、職員が間に入ることで会話の苦手な利用者も上手くコミュニケーションが取れるように支援している。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	長期入院から退去に至った方への定期的な見舞いは続けている。また、本人や家族と街中で偶然会うことも少なくなく、退去後の様子を伺う機会もある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常会話の中から、一人ひとりの思いや希望を引き出している。意志の疎通の難しい入居者に対しては、反応や態度から好みや希望を推察する努力をしている。	アセスメントシートを整備し、2ヶ月毎の定例会議で全入居者の状況を話し合ったり、日々の申し送り時に気づきを話し合い、個々の入居者の思いや意向の把握に努めている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族からの情報や本人からの昔話などから、これまでの暮らしぶりや馴染みのものの把握に努めている。それらを元に、これまでの生活環境に近い形にすることで、本人にとって過ごしやすい環境になるように努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の健康状態や過ごし方、本人の発した言葉は、そのまま日誌に記録し、全職員がいつでも共有できるようにしている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々変化する入居者の心身の状態を、毎朝礼時に共有し意見やアイデアを出し合うことで、臨機応変なケアを行っている。何よりも本人がより良く暮らすことを第一とし、一人ひとりの現状に即した介護計画を作成している。	朝礼時や定例会議で日頃の気づきを話し合い、状況に応じたケアを提供している。頻回なコールで身体の不調を訴える入居者の不安に寄り添ったり、歩行できないにも関わらず歩こうとする入居者を見守っている。	理念のその人らしい生活を支援するために、入居者の言動をそのまま受け入れて課題に表記し、転倒など命に関わる課題を優先した計画の立案を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や本人の発した言葉は、そのまま個別記録に記入している。朝礼や申し送りの時だけでなく、気づきや工夫はその都度職員間で共有し、実践や介護計画の見直しに活かしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族のニーズには、可能な限り対応している。型にはまらない柔軟な支援を行なうことで、入居者の笑顔、家族の安心感を得られるように努めている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	道の駅や地元行事に出かけたり、季節を感じるために花や草木の見学に行っている。単調な毎日になりがちなので、馴染みの場所や昔ながらの行事への参加など、定期的に心に張りや癒しを与えている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	希望があれば、かかりつけ医への受診も行っている。また、状態の変化により必要に応じて、市外の医療機関や複数の医療機関への受診も行っている。	歯科の訪問診療を支援したり、協力医療機関である地域の総合病院受診に同行し、随時家族に状況を報告している。頻回に不安を訴え訪問看護を利用していた入居者は近々同病院から訪問診療を受ける予定で、重度化防止に努めている。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は介護職員を兼務しており、夜勤もこなしているため、一日を通しての一人ひとりの心身の状態を十分に把握している。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は定期的に見舞いに行き、慣れない入院生活で不安にならないようにしている。また、病院関係者から情報収集を行い、通院治療が可能な状態になれば、医師との面談を申し入れ、早期退院を申し出ている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居説明時に、重度化した場合や終末期に向けた方針についての説明をしている。状態に応じたなるべく早い段階での話し合いの機会を設け、入居者や家族が今後の生活について、十分に考える時間が持てるようにしている。	昨年度は4名の入居者が医療機関に搬送され、2名が逝去された。施設長は全員が老衰状態であったと話している。入居時に重度化した場合の説明がなされており、医療依存度が高くなるまで家族との話し合いがなされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	様々なケースに対応したマニュアルを整備し、応急処置や緊急時の対応についての訓練を行っている。また、実際に起きた急変や事故発生時には、早急にミーティングを行い、初期対応に遅れがなかったか、適切であったかを振り返っている。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の消火・通報・避難訓練を行っている。火災・風水害・地震等の非常災害防災計画を整備している。代表者の自宅が隣接し、地元職員も多く、災害時には、夜間や休日でもいち早く駆けつけることができるような体制にしている。	今年度は7月と12月に避難訓練予定で、7月は夜間想定での訓練予定である。お米やジャガイモ等を備蓄し、井戸水を飲料水として使用している。周囲が畑の中の平屋のホームのため、火災時の避難場所は確保しやすい。	先日の大雨など昨今の異常気象に配慮し、運営推進会議でホームを地域の避難場所として提案するなど、地域との協力体制に関する情報交換を期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	画一的なケアにならないよう、一人ひとりの性格や生活歴・職歴を考慮した対応に心がけている。入居者の言動は決して否定せず、肯定的表現で受け止めることで、入居者の尊厳を傷つけないようにしている。	入居者間のトラブルや入浴時の着脱などの拒否を、其々の入居者が自分の誇りやプライバシーを保持する行動と肯定的に受け止め、職員の対応のスキル向上に努めている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員自身も入居者との会話を楽しむことで、本人が思いや希望を伝えやすい雰囲気作りに心がけている。重度化により自己決定の難しい方は、ご家族やまだお元気なときに発しておられた言葉から推察し、対応している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのその日の体調や気分を考慮し、入居者の希望にそった支援をしている。また、気持ちや行動の切り替えに時間を必要とする入居者に対しては、余裕を持って伝えることで、個々のペースを乱さないようにしている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	月に数回の美容の日を設け、ヘアカットを行っている。また、着替えの際には、好みの服が選択できるように支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	自家菜園や裏山で採れた旬の食材の下ごしらえは、入居者の楽しみのひとつである。食事の準備に携わることで、会話も弾み、楽しくおいしく食事のできる雰囲気になっている。	年4回外食に出かけ、回転寿司などを楽しんでいる。自家製の野菜を入居者と一緒に収穫したり野菜の下ごしらえをしているが、喜々として参加する入居者が多い。調査当日は、薄味で野菜たっぷりの昼食を完食する入居者も多いが、「美味しくなかったが、汁は美味しかった」など、笑顔になる感想もあった。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの健康状態や嚥下機能を考慮したうえで、バランスのとれた献立にしている。食事・水分摂取量は、健康管理表に記録している。また、水分摂取量に関しては、24時間シートを作成し、1時間刻みで摂取量を記入している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをし、清潔を保っている。歯茎の衰えから、入義歯が合わなくなる方がおられるため、定期的な往診により、義歯の調整や作り変えをしている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	自立に向け、一人ひとりの排泄パターンを把握する為に、排泄間隔や場所を記入する24時間シートを作成している。座位での排泄を支援するために2人体制で介助する場合もある。また、プライドに配慮したさりげないトイレ誘導を心がけている。	マイボトルで毎日350mlの水分摂取を勧めたり、腹部マッサージで排ガスや排便を促すなど、自然の排泄を支援している。前止めのおむつで入居した方は、座位での食事で少しずつ体力が向上し、現在は定期的な誘導で布パンツを着用するまでになっている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食物繊維の多い食品の摂取や水分量の確保、適度な運動を取り入れ、便秘の予防に取り組んでいる。刺激性下剤の服用は最終手段と考え、乱用しないようにしている。機能性下剤の使用も回数や量の調整を随時見直している。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	その日の体調や心身の状態に考慮し、清拭やシャワー浴に変更するなど、個々に応じた入浴支援をしている。また、入浴拒否の方に関しては時間帯や職員の変更をするなどし、無理強いせず気持ちのよい入浴になるように心がけている。	週3回の入浴を更衣室と浴室に其々職員を配置し、入浴を楽しめるように支援している。入浴時よろけるが、職員の介助を拒否する入居者もあり、家族に状況を説明して見守りをしている。浴槽に浸かるとそのあとは上がるとうしないため、対応に苦慮している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その日の体調や心身の状態に考慮し、夜間の睡眠以外の休息時間も促している。また、夜間の安眠に繋がるように、日中、適度な運動やレクリエーション等を取り入れている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服用している薬の詳細は、個別の服薬管理票で管理し、いつでも確認できるようにしている。また、下剤や睡眠薬の服用が長期に及ばないように、主治医に相談の上、コントロールしている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの残存能力や得意とする家事や作業をお願いしている。また、散歩や買い物の付き添い等、外出による気分転換も取り入れている。嗜好品は、必要に応じて個別に購入したり、持込をされる方がいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	気分転換に散歩や買い物に出かけたり、自宅近くへのドライブを取り入れている。また、普段の様子や排泄のタイミングなどを詳しく伝えることにより、家族との外出が不安なくスムーズに行えるように支援している。	ホーム周辺の散歩をしていた入居者も年齢とともに外出が億劫になっている方が多くなっているが、全員で季節の花見や外食に出かけている。幸神祭の神輿見学や道の駅での買い物、お寺のお齋に出かけた入居者もいる。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、2名の方が現金を所持している。普段は、事務所で預かっているが、希望があれば財布の中身を確認してもらったり、買い物の際に支払ができるように支援している。使用目的より、所持しているという事実に満足しているようだ。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、いつでも自由に自室で電話ができるように支援している。家族からの電話についてもどこでも受けることができる。家族へ年賀状や暑中見舞いはがきを出す方もおられる。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	一般家庭のような雰囲気心をかけている。玄関と洗面所に生花を飾り、季節感を採り入れ、居心地のよい共有空間づくりをしている。	静かな里山にあるホームに入ると、玄関傍にある厨房のある共有空間は、生活リクリエーションで野菜の下ごしらえをしたり、口腔体操をするなど、憩いの場となっている。事務室前のソファでおしゃべりしたり、廊下には縁台が2つ並べられ、憩いや昼寝の場所となっている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間や廊下の計3ヶ所にソファやベンチを配置し、自室に籠りがちにならないよう、気の合う利用者同士で自由に交流が持てるようにしている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	和室と洋室があり、一人ひとりの生活スタイルにあった居室を提供している。また、使い慣れた家具や雑貨を持ち込み、慣れ親しんだ空間になるように工夫している。	洋室に畳を敷いた居室やベット傍に設置したポータブルトイレで夜間のみ排尿する入居者もあるなど、心身の状況に応じた設えをしている。家具や時計、テレビを持参している居室もある。家族が宿泊できるスペースもあり、昼食後自室で横になる方も居られた。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレには大きく『便所』と書き、各居室には顔写真つきのプレートを下げることで、入居者が迷ったり不安になることのないような工夫をしている。		